《解説》

石井啓一郎

セイイェド・モジュタバー・ボゾルグ・アラヴィー（一九〇四-一九九七）は、サーデグ・ヘダーヤトより、一年年少のイランの作家で、日本での知名度はまだ低いが、イランの近代散文のなかで無視すべからざる巨匠の一人である。テヘランで、政治活動にも熱心であったバーザール商人の家に生まれた彼は、パハラヴィー朝帝政時代の第一代国王（シャー）のレザー・シャー時代の一九三七年に共産主義者との交流とマルクス主義のプロパガンダを行ったという理由で、七年の禁固刑に処せられ、レザー・シャーが退位する一九四一年に釈放されるまで、南テヘランにあったガスル監獄へ収監される。

一九五三年にモサッデグ政権がクーデターによって崩壊したとき、彼はちょうど当時の「東ベルリン」のフンボルト大学にペルシア語・ペルシア語文学の客員教授として滞在していたが、以後彼は当地に定住する。そしてその後のイラン・イスラーム革命、イラン・イラク戦争、ホメイニーの死去、ベルリンの壁崩壊と冷戦の終結、東西ドイツ再統合、などの祖国と世界の歴史的事件を目の当たりにしながら、九三歳の高齢で一九九七年に「統一ベルリン」で世を去った。亡命生活に入って世を去るまでに、再びイランを訪れたのは、一九七九年、一九八〇年、そして一九九三年の三度だけであった。

ここに訳出した「待望」は、作者が一九四一年に釈放されたのちに刊行した短編集『獄中の紙片』所収の一篇である。本書は五篇の作品から成っているが、いずれも必ずしも獄中という「異界」における、権力の非人道性や嗜虐性を告発すると言ったルポルタージュ的なものでもない。またそうした「権力」による虐待の実態への批判を展開しながら、己の信条の正統性や闘争的抵抗を殊更に主張するための道具立てとして「獄中」に舞台を設定しているわけでもない。無論、ここには当時の刑事行政や司法の未発達や恣意性（たとえば、殺人のような重大事案においてすら証拠採用や事実審のやり方が極めて粗雑である、など）、それゆえの不正義といった問題への批判的視線も示されてはいる。だが、本書は一義的には、牢獄という非日常の空間に隔離されてしまった「政治犯」の作者の目を通して、二〇世紀前半のイラン社会に生きた人々の風景や哀歓を描いた作品になっている。

そのために「獄中文学」という、ある意味ではステロタイプ化し易い舞台設定のはずが、このアラヴィーの作品の場合には、意外におよそ七十年前のイランの政治的位相はもちろん、生活文化・風俗誌的な背景などへの実感が乏しいと読みにくい部分が生じて、現代の日本人にとって、どれほど文学作品としての感情移入できるか、共感できるかという問題に難しさが生ずるようにも思われる。

その意味では獄中にあって、外界（俗な言い方をすれば「娑婆」）に残した女性をめぐって思い詰めてゆくなかで発狂する人間を描いた本篇は、この短編集のなかでは、もっとも日本の一般読者にアラヴィーの受容を促す意味では、妥当な選択ではないかと思料し選定した次第である。

なおアラヴィーは、一九四一年の出獄後、そしてレザー・シャー退位後のイランにおいて、一九五三年までの期間、政治的意味も含めて彼の作品が物議を醸した場面もあり、アクティヴィストとしての多くの政治的な姿勢、個人の思想信条、さらには感性的な文学者としての創作の姿勢・手法、といった問題を整理して、この巨匠の創作を読み解いてゆくうえには、多くの問題があり、限られた紙幅のなかでそれを要約することは難しい。また現時点で、筆者もそれに応えるだけの充分な定見を持っているとは言い難いのが偽らざると

ころである。

その意味では、筆者が現時点でアラヴィーの作品を概括的に評することには危険を伴うが、ひとつの仮説として今書けることは、アラヴィーの作品は彼の外面的な「政治的人間」としての行動のみに目を取られ過ぎていると、彼の文学のより深い部分を見誤るのではないかということであろう。アラヴィーの作品を読んで感じるのは、確かに二〇世紀の非ソヴィエト的な左翼知識人に独特な、ある種の「正義・ヒューマニズム」（これはかぎ括弧つきの概念として留保を加えて置くが）という価値観に敏感であることは否定しえないものの、彼の作品には、意外にドグマティックな政治性に固執することのない、やや人情モノ的に過ぎるような素朴さと直截さ、あるいは人間のもつ暗部や狂気を抉る筆致、と言った文学的技量に関して、過度に伝記的な事実と絡めて彼を「政治作家」と決めつけて読まぬ方が、作品に対する良心的で、偏りのないアプローチになるのではないかと、現時点で筆者は愚考する次第である。

〈付記〉

アラヴィーゆかりのガスル監獄は、二〇〇六年に筆者がテヘランへ行ったおりに、解体中であった。このとき筆者に同道してくれた運転手氏の話によれば、同監獄はその時点で軍の管轄となっているとのことで、絶対に写真撮影はしないようにと釘をさされ、高いフェンスで覆われた隙間から、わずかに古い監獄の監視塔らしき建物を見たのを記憶している。あの解体工事が所定の「工程」どおり解体されているなら（イランではこの種の工事に大幅な遅れが生じることも珍しくないらしいが）、もう同監獄は姿を消しているのであろう。